

横浜東邦病院  
副院長

## 横山圭子氏に聞く

横浜市港南区の上大岡駅からも至近、鎌倉街道沿いに立地する横浜東邦病院は、3つの理念「人間愛にみちた医療をめざします」「なにより質の良い医療の提供につとめます」「地域に根ざした病院でありつづけます」のもと、1979年に開設以来、365日休むことなく診療を続けてきた。病床数は一般病床47床と小規模ながら、整形外科・内科・外科・眼科・糖尿病外来・泌尿器科・皮膚科の各診療を展開。スタッフ数は医師、看護師、事務員を含め約130名と充実。外来患者数はリハビリ等も含めると1日500名を数えるほど、いわば「人気病院」である。

同院では、建物の老朽化等に伴い、病院の増改築を計画。2015年8月に新館をオープンさせた。そして、それに合わせて、同年5月から電子カルテを中心とした病院情報システムを構築、稼働させ、診療業務の効率化を図った。IT化の経緯について、同院副院長の横山圭子氏はつぎのように話す。

「病院増改築を決定したのは2012年夏頃でした。新病院については、当初広い敷地を確保するために現在の土地を売却して移転することも検討されましたが、患者さんのアクセス等を検討した結果、37年間診療を続けたこの場所で診療を続けることにしたのです。そのために、ま

## IT System Innovation Review

### 神奈川県●横浜東邦病院

# 新しい選択—建設会社の医療ITコンサル。専門家不在の小規模病院で効果を発揮し、365日“休まない病院”のIT化を成功させる

横浜市港南区において1979年の開院以来、まさに休むことなく診療を続けてきた横浜東邦病院。高齢化の進展と、より高度な医療の展開に対応すべく病院リニューアル計画が3年前にスタート。その内容は、より高機能、患者に優しい新館の建設に加え、電子カルテを中心にしたIT化であった。病院トップは、その計画から完成までを、すべてに精通したコンサルテーション企業に委ねることにした。それは大きな効果をもたらし、2015年8月に無事新館オープン。患者の支持も高いという。同院の理念ならびに新病院に込めた思い、そしてIT化の経緯について梅田院長と横山副院長に聞いた。



横浜東邦病院では大林組のコンサルテーションにより、電子カルテシステムを中心とした病院情報システムを導入。「初めてのIT化を推進する上で大林組の存在は大いに助かった」と話す同院副院長の横山圭子氏

ず新館をオープンさせて、本館（既存）からの引越しの後、本館部分を改修することにしました。

病院の新築および拡張が決まったことで、将来患者数の増加は、かなり期待できました。しかし、カルテ庫のスペースを確保することが難しく、世の流れも電子化に向かっていく以上、今回の増改築で機に、電子カルテの導入を図ることになったのです。しかし、そうはいったものの具体的計画が進まないうまま、まず建物の設計が進行していきました。

一方、新病院の建築についても院長の理念を実現すべく設計に時間をかけたため、最終的に施工会社が大林組に決まったのは2013年夏のことでした。その頃、電子カルテについてはほとんど決まっておらずに困っていたところ、医事課から大林組で電子カルテ導入のサポートもできる」と聞き、相談したのがインテグレーションを依頼する契機となりました」

### IT化に不慣れた病院スタッフに代わり電子カルテ導入を主導

大林組は、建設業におけるノウハウを生かした情報エンジニアリング部門を有

しており、企業や医療機関がシステム・ネットワークを導入する際のインテグレーションを行っている。また、医療・介護施設でのシステム構築ではすでに50件以上の実績があり、本業で培ってきたマネジメント力、専門知識に基づいた品質管理および工程管理、顧客の要望への対応力などで、高い評価を得ている。

同院のシステム選定のポイントとシステム構築における大林組の貢献について、横山氏はつぎのように話す。

「当院は外来患者数が非常に多いため、電子カルテの運用においてはできるだけ短時間で、かつスムーズに処理を行えることが絶対条件でした。そのため医師の使い勝手を重要視し、4社のシステムから選定を行うことにしたのです。また、情報の共有化による医療の質の向上に加え、会計処理等も含めた患者さんの待ち時間短縮も選定作業で考慮した点です。

大林組は電子カルテ選定の際に、4社のシステムの違いを明確にして、それを非常にわかりやすく一覧表にまとめるなど、丁寧に説明してくれたことは有り難かったですね。あの資料の制作だけでも、当院の職員だけでは難しかったと思います。また、実際のシステム導入においても、院内スタッフを中心に構成された電子カルテ委員会での決定事項が建築施工担当者にもスムーズに伝わるなど、意思の疎通面での連携に大きな貢献をしてくれました。おかげで、システム構築時のトラブルも少なかったですね」

大林組は、病院情報システム導入の中



横浜東邦病院  
院長  
**梅田嘉明氏に聞く**

梅田嘉明氏は、東邦大学病院に勤務後、37年前に横浜東邦病院を開院し、現在の地域からの高い評価を築いてきた。梅田氏に、同院の診療の現況と医療IT化の評価、そして2015年に建てた新病院への思いを聞いた。

——横浜東邦病院の特徴からお聞かせください。

患者最優先の医療実践こそ最大の特徴ですが、具体的には、47床と小規模ながら365日、休むことなく診療を行っていることが挙げられます。夜間や土日・祝日も内科系と外科系の医師各1名を置き、医療の質を担保しています。おかげさまで外来患者数は1日約500名を数え、地域からの信頼も厚いと自負しています。

——新館建設において注意を払った点はありますか。

病院にとって最も大事なのは患者に対する接遇であり、そのための設計ですが、もう1点、“色”にも拘りました。多くの病院のインテリアはグレーや白がほとんどですが、当院は少しでも患者さんの気持ちを明るくするため、シンボルカラーのオレンジを各所にあしらっています。

また、病院で患者さんが最も不満を感じるのは“待たされる”ことですから、待合室には格段の配慮をしています。待合室の椅子は病院としてはかなり上質のものを設えている他、親友で著名な工業デザイナーである拓殖大学 寺澤 勉名誉教授のアイデアで、院内の壁はブルーのグラデーションカラーにし、また白樺の木や動物たちをその壁に描くなど、まるでホテルのような“病院らしくない病院”を目指しました。おかげさまで、「1

日も長くこの病院にいたい」という患者さんからの声もいただいています。

——今回の医療のIT化への所感をお聞かせください。

IT化の流れは世の趨勢です。電子カルテは会計処理が早く、診療後の待ち時間短縮に貢献しますし、過去の診療データも瞬時に参照できるなど便利な点が多くあります。副院長を中心に、大林組の協力もあってIT化も上手に進められたと感じています。

——今後の展望についてお聞かせください。

現在進めている本館の改修作業が済めば、当院は47床から96床の病院に生まれ変わりますが、これらの病床のうち半分は療養型病床です。現在、当院周辺も急速な高齢化が進んでおり、今後は療養型病床が重要となります。当院は急性期病院として地域住民の信頼を得てきましたが、今後は療養型病院としても、日本の戦後復興を支えてきた大先輩方を支える医療を展開していきたいと考えています。



所在地：神奈川県横浜市港南区最戸1-3-16  
URL：<http://www.yokohama-toho.jp/>

### 大林組 情報エンジニアリング部

株式会社大林組は、1892(明治25)年創業の日本の大手総合建設会社。技術力においても国内トップクラスの企業である。同社では、建設業で得たノウハウを生かし、病院情報システム導入をトータルでサポートするICTサービスを展開。2015年までに医療関係で50件以上のICT関連工事を受注、実施している。

所在地：東京都港区港南  
2丁目15番2号  
電話番号：03-5769-1803  
URL：<http://www.obayashi.co.jp/>

診療に取り組むべきではないでしょうか」

心組織である電子カルテ委員会に参画して、病院側とシステムベンダーとの間の意見を調整し、システム構築が円滑に進むようにプロジェクト全体をサポート。電子カルテ稼働直前には、リハールスの重要性を病院スタッフに説き、外来と病棟で各3回以上のリハールスを実施したという。さらに、電子カルテの操作に関しても病院スタッフの意見を聞きながら補習をくり返し行うなど、システム稼働後の混乱を最小限に抑える取り組みを展開した。その結果、稼働後1カ月程度で、システムは完全に安定したという。

「大林組が、システム構築の工程管理やシステム運用に関するリハールスの実施など、当院の建て替え計画に合わせてプロ



横浜東邦病院では、電子カルテ「新版e-カルテ(ソフトウェア・サービス)」を導入。情報の共有化による医療の質の向上を図っている。写真は電子カルテを操作する横山圭子氏

ジェクトをサポートしてくれたので、当院の経営の根幹である外来診療を1日も休むことなく、病院情報システムを構築することができました。

中でもリハールスの重要性は、実際に院内で実施してみても初めて実感しましたね。その都度大林組に親身にサポートしてもらったことで、無事システム稼働にこぎつきました。システム導入に関する院内の直接の担当は医事課ではあるものの、同課は通常の院内業務を果たすだけで精いっぱいです。病院情報システム構築という、本来イレギュラーな、しかし極めて重大、かつ専門的な業務を通常業務の合間に推進することは非常に困難です。

大林組は病院側の立場に立って、専門

的な立場から電子カルテ導入に取り組んでもらい、大いに助かりました。大林組が電子カルテ導入に参加してくれたことには、とても感謝しています」

同院では、現在旧本館の耐震工事を含めた改築工事が進められており、工事が完了すると96床の病院として生まれ変わる。システムも、病院のリニューアルに合わせて拡張していく予定だ。小規模病院の電子カルテ導入について、横山氏はつぎのように話す。

「電子カルテ導入に限ったことではありませんが、IT化のようなプロフェッショナルな仕事は、その道のプロに任せる方がスムーズに作業が進むと感じますね。インターネットグレートとの信頼関係が構築できさえすれば、医療はともかく、ITには素人同然の病院関係者があまり口を挟まず、大胆に任せた方がよい結果になると思います。プロに任せるべきところは任せ、病院スタッフはその分、プロとして患者さんへの診療に取り組むべきではないでしょうか」